清泉女子大学附属図書館蔵「奈良絵巻鶴亀松竹物語屏風」を用いた授業実践

小野　春菜

Abstract:

Report on a class using “Nara Emaki Tsuru-Kame-Matsu-Take Monogatari Byobu” in the Collection of the Seisen University Library

This paper reports on the class activities conducted in the second semester of 2021. In this class, we created a transcribed text using a folding screen in the collection of the Seisen University Library. The name of the screen is *Nara Emaki Tsuru-Kame-Matsu-Take Monogatari Byobu* 奈良絵巻鶴亀松竹物語屏風.

In the academic year 2020 and the first semester of 2021, online classes were offered as a countermeasure against COVID-19 infections. First, an overview of the classes conducted in each year will be given. Next, the differences between the on-demand and hybrid formats of group work will be listed. In addition, the reason of selection for the subject matter to be covered in class will be presented to clarify what was done in this activity.

In the second semester of 2021, the students transcribed texts using a folding screen, a resource in the university’s collection. From the syllabus and each week’s outline, a report on the process of students reading the kuzushi-ji characters [cursive script] is given. At the end of the report, a transcribed text will be posted as student achievement.

要　旨：

本稿では、2021 年度後期に実施した「くずし字解読演習 2」の授業報告を行う。本科目では、清泉女子大学附属図書館蔵「奈良絵巻鶴亀松竹物語屏風」を使用し、本資料に書かれたくずし字の解読を受講生が行った。

2020 年度および 2021 年度前期は、新型コロナウイルス感染症対策としてオンライン授業が実施された。まず、各年度で実施した授業概要を述べる。次に、オンデマンド形式とハイブリッド方式のグループワークの相違点を挙げる。そして、授業で扱う題材の選定基準を示すことで、本科目の実施内容を明らかにする。2021 年度後期には大学所蔵資料である屏風を使用し、学生による翻字が行われた。シラバスと各週の概要から、学生がくずし字を解読する過程を報告する。稿末には、本科目で教材とした「奈良絵巻鶴亀松竹物語屏風」の翻刻を掲載する。

キーワード：
くずし字　オンライン授業　奈良絵巻鶴亀松竹物語屏風

はじめに

清泉女子大学文学部日本語日本文学科では、2012 年より「くずし字」[1] の解読を目的とする授業が 1 年次生の必修科目に設定されている[2]。必修科目では、変体仮名の解読を中心に行う。授業内においては、この行為を「翻字」と呼び表し、「字母」「字形」などの術語を使用しながら、学生は学習に取り組む。翻字を正確に行えたかどうかを成績評価の基準とすることから、意欲を持って取り組む学生も少なくない。

また、2 年次生以上を対象とした「くずし字」解読の応用科目が設定されている[3]。選択科目であり、1 年次の履修を通して発展内容に取り組みたいと考える学生に向けた内容となっている。具体的には、必修科目とは異なる時代の資料を扱い、漢字を含めた「くずし字」の解読を目的とする。履修する学生の割合は 2 年次生が多いが、前年度に履修した 3 年次生、4 年次生が受講する場合もあるため、毎回異なる資料を題材としている。

稿者は、2016 年度、2017 年度にティーチングアシスタント（TA）として両科目の授業補佐を行い、2018 年度後期より授業担当の一人に加わった。2020 年度からは、新型コロナウイルス感染症対策として授業形式が多様化し、清泉女子大学の LMS「学びの泉」[4] に授業資料を提示するオンデマンド授業や、ウェブ会議システム（Zoom）を使用する遠隔授業といった、いわゆるオンライン授業が行われた。そのため、これまでの授業形式である対面形式を前提とした受講形式からの転換が課題となった。

本稿では、2020 年度、2021 年度に実施した「くずし字解読演習」の概要を示した後、2021 年度後期に実施した「くずし字解読演習 2」の実践例を報告する。「くずし字」指導の一例として報告するとともに、授業の題材とした清泉女子大学附属図書館蔵「奈良絵巻鶴亀松竹物語屏風」の翻刻を稿末に掲載し、大学所蔵資料の共有を図る。

1．オンライン形式による授業内容の変化

清泉女子大学では、2020 年度入学者から BYOD（Bring your own device）

が実施され、学生一人ひとりがノートパソコン等の端末を所有する方針となった。また、2021 年度からは、カリキュラム改訂に伴い、授業時間が半期 15 週 90 分から、半期 13 週 105 分へ変更された[5]。これらの方針は、新型コロナウイルス感染症の流行以前に決定していたものの[6]、結果として授業形態の大幅な変更に繋がった。

「くずし字解読演習」（以下、「本科目」とする）では、例年、グループワークを実施している。受講する学生が「くずし字」に対してポジティブな印象を持っているとしても、習熟度は個々人によって異なる。そのため、翻字作業を協力しあうことで、共通の課題に対して、学生同士が互いに声を掛け合う環境を構築することを目的とする。

2020 年度は、使用教材を PDF ファイルと音声ファイルで配信し、学生に課題を伝えるオンデマンド形式で授業を行った。グループワークに際しては、LMS 内の掲示板でのやり取りを指示し、翻字に際しては Google ドキュメントの使用を推奨した。結果として、グループによって意見交換の回数に差があり、個々人で Microsoft Word に翻字したものを確認しあうグループも見られた。オンデマンド形式という特性上、学生が授業内容を確認する時間は異なるため、学生によっては負担感が生じたものと推察する。

2021 年度は、対面形式を前提とした授業が行われた。前期では、大学の所在する東京都に緊急事態宣言が発出された影響で、オンライン授業へと移行した週があったものの[7]、Zoom を併用していたことから、滞りなく移行することができた。後期は、全 13 週を対面形式で実施したものの、体調を考慮して Zoom から授業に参加し、出席する学生も見られた。そのため、オンデマンド形式と比べて、グループワークは円滑に行えたと考える。また、LMS を通じて PDF ファイルを配布していたことから、資料を印刷する手間がなくなり、学生にとっては、紛失の可能性が低くなったといえる。

そのほかの点として、本科目では TA を採用し、教員とともに学生の翻字に対するアドバイスを行っている。オンライン授業においては、学生が翻字する様子や思考のプロセスをたどる姿を観察しにくいことから、授業資料の作成補助や、教材提示の補助といった、これまでとは異なる補佐を

依頼した。

2．授業で扱う題材

次に、本科目で教材とした資料について説明する。

半期のうち、第 1 回から第 3 回まではウォーミングアップとして、学生に復習の機会を与えている。これは、1 年次の必修科目が、1 学年を 2 グループに分けた半期ごとの開講であること、本科目が半期ごとの開講のため、前期（「くずし字解読演習 1」）から受講した学生と、後期（「くずし字解読演習 2」）から受講した学生の間で、記憶の定着度が異なる可能性を考慮した結果である。

そのうえで、2020 年度、2021 年度に全丁の翻字を行った資料は、表 1 に掲げた 5 つである。なお、履修者数は、単位を認定した学生数を表す。休学等の事情から受講を取り下げた学生や、出席回数が単位認定基準の 3 分の 2 に満たない学生は数に含めなかった。

（表 1）「くずし字解読演習」で全丁を翻字した資料

年度	期	履修者数（人）	使用した資料（成立年）
2020	前	25	南仙笑楚満人撰 ・北尾重政画『絵本高麗嶽』（1802 年〈享和 2〉） 大江文坡著・下河辺拾水画『絵本武者大仏桜』（1776 年〈安永 5〉）
2020	後	23	曲亭馬琴・北尾重政画『備前擂盆一代記』（1800 年〈寛政 12〉）
2021	前	11	月岡雪鼎画『絵本蘭奢待』（1764 年〈宝暦 14〉）
2021	後	7	「奈良絵巻鶴亀松竹屏風」（江戸後期）

2020 年度前期から 2021 年度前期までは、カリフォルニア大学バークレー校による「C.V.スター東アジア図書館所蔵日本関連特殊コレクション」掲載資料を使用した。現在、本科目の授業成果として、2020 年度前期に実施した『絵本武者大仏桜』『絵本高麗嶽』の二作品の翻刻がインターネッ

ト上で公開されている[8]。2020 年度後期に扱った『備前播盆一代記』、2021 年度前期に扱った『絵本蘭奢待』の翻刻も順次公開予定である[9]。

これらの資料は、3 つの観点から選定を行った。1 点目に、資料の所蔵館が限定されていること。2 点目に、読みやすい文字が書かれていること。3 点目に、翻字の作成期間に対して適切な分量であることが挙げられる。次に、それぞれの観点について詳述する。

2.1　資料選定の基準

まず、1 点目の「資料の所蔵館が限定されていること」とは、換言すれば、活字化されている可能性の少ない資料を選択することを指す。既に翻刻がなされている資料を使用した場合、学生がインターネット等で所蔵情報を検索し、翻刻された本文を参照して翻字を行う可能性は否定できない[10]。同様の理由から、C.V.スター東アジア図書館所蔵日本関連特殊コレクションの「《UC Berkeley 日本古典籍閲覧システム》」において、「翻刻状況」欄が「完了！」「進行中」「準備中」のように着手されていることがわかる資料は対象から除外した[11]。

2 点目の「読みやすい文字が書かれていること」とは、文字の大きさ、仮名・漢字の含有率、印刷や保存の状態のように、いくつかの視点を介在して教員が「読みやすい」と判断することを指す[12]。書名や挿絵から内容を判断すると、結果として学生が解読できない「くずし字」で書かれている可能性がある。また、半期科目であることから、仮名が多く、漢字も頻出するものが含まれている文章を選択するように心がけている。

本科目では、「くずし字」解読の補助資料として、必修科目において教科書指定されている『字典かな』（笠間書院）や、人文学オープンデータ共同利用センター（CODH）が提供する「日本古典籍くずし字データセット」[13] 内の「くずし字データベース検索（ひらがな（変体仮名）・カタカナ・漢字）」などの併用を薦めている。2021 年度からは、大木一夫編『ガイドブック日本語史調査法』（ひつじ書房）の別表 2「頻出くずし字（漢字）一覧」を新たに加え、なるべく学生が自力で読み解けるように準備を行った。

3 点目の「翻字の作成期間に対して適切な分量であること」とは、2 点

目の理由とも重なる点がある。1 点目と 2 点目の条件を満たしても、授業期間内に翻字を終わらせられない分量や、設定された期間内に容易に翻字できる分量であれば、学生のモチベーションは低下するであろう。そのため、資料の選定にあたっては、設定された作業期間内で翻字を完了し、自分たちの作成した内容をグループで振り返る時間を確保できる分量である必要があると考える。

以上の視点から資料の選定を行ったが、図らずも、いずれも江戸後期の資料となった。

2.2　2021 年度後期における翻字資料の選定

2021 年度後期は、清泉女子大学附属図書館に蔵する「奈良絵巻鶴亀松竹物語屏風」を使用し、7 名の学生を 2 グループにわけた上で翻字を行った。

これまでの資料とは異なり、本学所蔵資料を使用した理由として、まず、2018 年度以前に本学所蔵資料を扱っていたことが挙げられる。2017 年度後期には、「文正草子貼り交ぜ屏風」を使用しており、授業風景や履修生へのインタビューを行った動画がインターネット上で公開されている[(14)]。また、本科目を稿者が担当するようになってからも、『源氏哥賀留多』（2018 年度後期）や『古今集かるた』（2019 年度後期）を使用している。

大学所蔵資料を翻字資料に扱う意義として、山本聡美（2016）は、大学所蔵資料を変体仮名読解に使用する理由を三点挙げる。そのうちの一つに、「大学所蔵の貴重書を用い古典を身近に感じながら学ぶ経験が、全ての履修学生にとって大きな学習効果をもたらす」点を挙げる[(15)]。また、本稿で紹介する「奈良絵巻鶴亀松竹物語屏風」は、2017 年 8 月に教材資料として使用するべく、今野真二、内田久美子両名とともに翻字が作成されている。結果として、2017 年度後期は先述した「文正草子貼り交ぜ屏風」を使用することになり、この翻字は蓄蔵されていた。

2021 年度より対面形式での授業が再開されるにあたり、例年後期に実施していたカルタの使用を避ける必要があると考えた。また、屏風の使用は、和本以外の形態に書かれた「くずし字」を読む機会になる。なによりも、2017 年 8 月以来、手つかずとなっていた本資料を今一度確認する機

会ではないかと考え、授業の題材に決定した。

3．シラバス（授業計画）

2021 年度後期に実施した本科目の授業計画は、次の表 2 の通りである。

（表 2）2021 年度「くずし字解読演習 2」授業計画

第 1 回（10 月 5 日）	授業概要・ガイダンス
第 2 回（10 月 12 日）	解読練習（1）
第 3 回（10 月 19 日）	解読練習（2）
第 4 回（10 月 26 日）	解読練習（3）
第 5 回（11 月 2 日）	解読練習（4）
第 6 回（11 月 9 日）	中間報告の準備
第 7 回（11 月 16 日）	中間報告
第 8 回（11 月 30 日）	グループワーク（1）
第 9 回（12 月 7 日）	グループワーク（2）
第 10 回（12 月 14 日）	グループワーク（3）
第 11 回（1 月 11 日）	提出課題の準備
第 12 回（1 月 18 日）	正解確認
第 13 回（1 月 25 日）	まとめと振り返り

2021 年度後期は、屏風の解読を目的としていたことから、第 1 回と第 13 回には教室で屏風の現物を確認した。また、第 2 回、第 3 回には、「くずし字」の予習・復習として、市岡猛彦校、岡田玉山画『伊勢物語図会』（1825 年〈文政 5〉）と、奈良絵本の『浦島太郎』、『大和物語』の一部を翻字した[16]。第 4 回から第 11 回を屏風に書かれた詞書の解読に充て、第 12 回、第 13 回は翻字の最終確認を行った。

授業の基本的な流れは、配布資料の確認を行ったのちに、翻字を実施するという二本立てである。授業終了時刻の 10 分前には、LMS のアンケート機能を通じて、リアクションペーパーの回答を促した。第 1 回から第 3 回では、①授業内に翻字した資料の正解数、②授業の感想や質問、という計 2 問を行い、学生の理解度を把握した。また、Zoom を使用してブレイ

クアウトルーム以外の授業内容を録画し、授業終了後に学内アカウントのみの限定公開を行った。

各回によって授業の進行に相違点があるため、次節以降に詳述する。

4．授業報告

4.1　第 1 回～第 3 回　ウォーミングアップ

第 1 回では、まず、上述した表 2 の授業計画を伝えた。そして、古典籍の扱い方を説明した後に、屏風を保管箱から取り出して展開した。事前に屏風の画像データを作成していることを伝えた上で、フラッシュをたかないことを前提に写真撮影を可とした。また、架蔵本の本居春庭『詞八衢』（文化 8 年刊）上下二冊を提示し、屏風の成立年代である江戸後期の資料を確認する機会を設けた。

そして、ウォーミングアップとして、『詞八衢』の序文（植松有信）、跋文（本居大平）の一丁表をテスト形式で翻字し、同時代の異なる字形を確認することとした。序文では漢字が既に記載されている穴埋め方式、跋文ではマス目のみで漢字が記載されていない方式でテストを実施し、学生の解読能力を確認した。授業資料を授業日の午前 9 時に LMS で公開しているが、第 1 回ではプリントを用意し、第 2 回以降は、学生が個々に印刷やダウンロードを行うように伝えた。

第 2 回と第 3 回では、『伊勢物語図会』、奈良絵本『浦島太郎』『大和物語』の解読を行った。これらの資料は、いずれも江戸後期の成立であり、挿絵と詞書から成る。各資料から 2 丁分を半丁ごとに翻字を行い、正解を発表した。翻字にあたっては、読みにくい漢字や平仮名に対してヒントを与え、学生がなるべく自力で解読できるように心掛けた。ただし、翻字作業の時間制限を延長する場合もあり、難易度の設定には難があったと考える。

4.2　第 4 回～第 7 回　屏風の解読（1）　右隻、左隻の解読

第 4 回から第 7 回では、7 名の学生を 2 グループに分け、屏風の右隻、左隻ごとに翻字の作成を促した。屏風は、六曲一双であり、各隻に挿絵六枚、詞書六枚が貼付されている。本科目では、詞書を解読作業の対象とし

て、挿絵には触れなかった。

屏風の現物を毎回の講義で持参することは、万一の破損の危険性があるため、教員が事前に屏風の撮影を行い、学生が翻字を行う際には、撮影された画像データを確認することとした。画像データは、教員の学内アカウントから Google ドライブで共有し、LMS へのアップロードは避けた。

また、Zoom のブレイクアウトルームを使用し、①翻字 60 分、②教室内の換気および休憩 10 分、③翻字 20 分、のスケジュールを組んだ。105 分の授業内で翻字を行うにあたり、メリハリをつけることで集中力の持続を図るためである。①の際には「巡回」と称して、教員と TA が各グループのブレイクアウトルームに入室した。巡回は、20 分経過後、40 分経過後の計 2 回行い、学生の質問対応の時間とした。各グループの翻字の状況や進度を確認しながら、学生の質問をもとに、2017 年 8 月に作成した翻字のチェックを進め、誤りがないかを確認した。

教室内では、飛沫感染を防ぐため、学生が教壇側を向いてパソコン操作を行うことを原則とした。ブレイクアウトルームでは、相互に確認したい翻字を画面共有したり、質問の際に映し出したりと、パソコンの画面上で確認したい箇所を表示する操作が行われた。ただし、ブレイクアウトルームを実施していても、各自で翻字に取り掛かり、画面共有等が行われていない場合もあった。その場合には、巡回時に現在の翻字の進度や質問箇所の確認を口頭で行った。

グループによっては、LMS 内の掲示板に Google ドキュメントの URL を記載し、翻字を同時進行で行っている場面も見られた。今期は 2 グループでの実施であったが、担当する翻字を最初に分担したり、メンバー全員で初めから翻字したりと、グループによって作業手順の違いが確認された。

第 7 回には、中間報告を実施した。中間報告では、屏風の画像データから一人一面を取り上げ、作成した翻字を読み上げることとした。中間報告の目的は、学生の作成した翻字に疑義がないかを、もう一方のグループが確認し、精度を高めることである。読み上げに際しては、Zoom の画面共有機能を使用し、画像データをスクリーンに提示することとした。質問の際には Zoom の注釈機能を使用し、質問された該当箇所をマークする作業を行った。

中間報告で学生の確認する内容には、漢字が多かった。振仮名のない資料のためと推測されるが、学生ごとに同内容の質問はなかったことから、各自で理解する漢字に違いがあったと考える。

4.3　第 8 回〜第 11 回　屏風の解読（2）　一双の解読

第 8 回から第 11 回は、各グループで翻字を行っていない方の翻字に取り掛かった。すなわち、両グループともに屏風一双の翻字を行ったといえる。中間報告での指摘を踏まえた上で、各グループで翻字の精度を高め、第 10 回の授業時には両グループともに一通りの翻字が完了していた状態であった。第 11 回の翻字提出の際には、両グループともに授業時間内に設定した締切までに翻字の提出を完了させており、授業資料としての設定は適当であったと考える。

4.4　第 12 回〜第 13 回　正解確認と振り返り

第 12 回は「正解」と呼称する教員作成の翻字を提示し、学生が作成した翻字から正誤を判断する作業を行った。この作業にともない、学生は自身が担当した箇所の正誤を計測し、教員へ報告することとした。

第 13 回は振り返りの時間として、屏風を教室で展開した。学生は、グループごとに各隻と作成した翻字を校合し、誤字脱字がないかを確認した。学生に共有していた屏風の画像データは詞書のみのため、挿絵に注目する学生が多数を占めた。最後に集合写真を撮り、屏風の画像データを共有した Google ドライブに保存を行った。なお、撮影した写真は私的利用にとどめ、SNS 等への公開は許可申請を行っていないことから原則禁止とした。

おわりに

本稿では、「くずし字」の解読を意欲的に行う学生に向けた授業の実践例として、清泉女子大学附属図書館所蔵の「奈良絵巻鶴亀松竹物語屏風」を使用した授業報告を行った。周知のとおり、近世期の資料をはじめとして、翻刻の行われていない資料は数多く存在する。また、本科目においては、翻刻が世上に出回っていない資料を教材として選択してきた。大学図

書館所蔵の資料を使用して翻刻を行い、その成果が公開されることは、学生が大学所蔵の資料へ理解を示すとともに、大学図書館からの発信に繋がるであろう。一連の報告が、くずし字指導の一例として供するとともに、本文研究の一助となり、広く知れ渡るきっかけとなれば幸甚である。

注

（1）本稿では、行草書体で書かれた平仮名と漢字の総称として使用する。

（2）2021 年度現在の科目名は「初級くずし字解読演習」。2020 年度以前の科目名称は「くずし字解読基礎演習」。

（3）2021 年度現在の科目名は「くずし字解読演習」。2022 年度より「中級くずし字解読演習」「上級くずし字解読演習」にカリキュラムを変更し、学生の解読能力に応じた授業内容へ移行する予定である。

（4）Learning Management System 学習管理システム。「学びの泉」では dotCampus を使用する。

（5）ただし、2020 年度前期は、開講期間が当初予定されていた授業開始日および終了日より繰り下げられたことから、半期 13 週 90 分で実施された。

（6）清泉女子大学公式 web サイトに掲載されている「2019 年度事業計画」では、「事業計画の基本方針」が 16 項目挙げられている。2 項目目の「カリキュラム改革」では、「2021 年度から実施予定の総合改革」の 1 つとして「(半期 13 週 105 分授業への移行」の記載がある。また、4 項目目の「BYOD 導入及びそれに付随する施設・設備の整備」において、「2020 年度入学者から BYOD を全面実施する」旨が記載されている。(https://www.seisen-u.ac.jp/albums/abm.php?d=284&f=abm00002617.pdf&n=2019%E5%B9%B4%E5%BA%A6%E4%BA%8B%E6%A5%AD%E8%A8%88%E7%94%BB.pdf 2022 年 3 月 1 日閲覧)

（7）2021 年は、東京都で 4 月 25 日～6 月 20 日、7 月 12 日～9 月 30 日の期間に緊急事態宣言が発令された。本科目では、第 3 回から第 10 回、第 13 回にオンライン授業が行われた。なお、第 10 回は対面授業が可能な期日（6 月 22 日）ではあったが、オンライン授業

とした。

（8）2022 年 3 月 1 日現在。カリフォルニア大学バークレー校 C.V.スター東アジア図書館所蔵日本関連特殊コレクションのホームページにおいて、「清泉女子大学担当翻刻プロジェクト」のページが作成されている。https://www.arc.ritsumei.ac.jp/lib/vm/UCB/2020/11/c2.html（2022 年 3 月 15 日閲覧）

（9）本稿の校正を行う 2022 年 5 月には、両作品の翻刻が公開されている。

（10）なお、『備前播盆一代記』は、林美一編輯・校訂『未完江戸文学』第三冊（未完江戸文学刊行会、1953 年）に翻刻が掲載されているが、明らかな誤刻も認められ、本科目の翻字方針とも異なる。翻刻の影印版は『草双紙研究資料叢書』第六巻（クレス出版、2006 年）に収録されている。

（11）本データベースを掲載する「立命館大学 ARC 古典籍ポータルデータベース」（https://www.dh-jac.net/db1/books/search_portal.php）では、立命館大学アートリサーチセンター所蔵の『絵本蘭奢待』の「翻刻状況」欄が「進行中」と表示されている。2021 年度前期に行った翻字とは異なる点が散見すること、C.V.スター東アジア図書館所蔵本は翻刻が行なわれていないことから使用を決定した。

（12）2021 年度前期に扱った『絵本蘭奢待』では欠丁も認められたため、フリーア美術館が公開する「The World of the Japanese Illustrated Book」内から、「絵本蘭奢待」（https://pulverer.si.edu/node/738/title）のデジタル画像を併用して翻字を行うように指示した。

（13）http://codh.rois.ac.jp/char-shape/（2022 年 3 月 15 日閲覧）

（14）「「授業で屏風をよんでみよう！」（2017 年度「くずし字解読演習」）」https://youtu.be/8ORiWCOlX24

（15）山本聡美（2016）は、変体仮名読解資料の作成にあたり、共立女子大学所蔵『平家物語絵巻』を選択する。

（16）『伊勢物語図会』では、カリフォルニア大学バークレー校東アジア図書館所蔵資料（https://www.dh-jac.net/db1/books/UCB-hp4130-01/berkeley/）のデジタル画像を使用した。『浦島太郎』では、室町物語

影印叢刊（三弥井書店、2009 年）、『大和物語』では、龍谷大学図書館所蔵資料（http://www.afc.ryukoku.ac.jp/kicho/cont_06/pages_06/v_menu/0637.html）のデジタル画像を使用した。

参考文献

福嶋健伸・小西いずみ編（2016）『日本語学の教え方　教育の意義と実践』くろしお出版

藤沢毅（2013）「和本リテラシー教育の実践」『日本文学』62-1

山本聡美（2016）「共立女子大学図書館所蔵「竹取物語絵巻」を用いた変体仮名教材制作」『共立女子大学・共立女子短期大学総合文化研究所紀要』22

【翻刻】清泉女子大学附属図書館蔵「奈良絵巻鶴亀松竹物語屏風」

資料詳細

・資料名　奈良絵巻鶴亀松竹物語屏風
・形態　六曲一双
・成立年代　江戸後期成立
・資料 ID　00004878883（右隻）、00004878891（左隻）
・請求記号　758/N51/1（右隻）、758/N51/2（左隻）

凡例

・底本には、清泉女子大学附属図書館に所蔵する「奈良絵巻鶴亀松竹物語屏風」を使用した。
・本資料は、一面に挿絵と詞書を 1 枚ずつ配置する。配置は、各隻の第一扇上段に挿絵、下段に詞書を配し、第二扇上段に詞書、下段に挿絵があり、隣接する面の配置が異なる。
・各隻に挿絵 6 枚、詞書 6 枚がある。翻刻にあたっては、詞書を対象とした。
・翻刻に際しては、本資料を撮影した画像データを使用した。挿絵は上述

の通りとし、翻刻には示さない。
・改行は底本の通りとした。なお、底本は縦書きである。
・変体仮名は現行の字体に改め、漢字は底本の表記に従った。
・解読不能と判断した箇所には、「□」を施した。
・二文字以上の繰り返し符号（踊り字）には、「／＼」を使用した。
・本稿における翻刻は、2021 年度後期科目「くずし字解読演習 2」を履修した次の学生諸子によって作成された。なお、翻刻の最終確認と各面の見出しは、小野春菜が担当した。
雉井千沙希、遠藤れいら、木村茉奈実、佐藤翠、関あすか、吉田真愛、吉田美咲。（五十音順）

［右隻第一扇］
此あきつしまに御門はしまらせ給てすて
に四代にあたらせ給ふをはいとく天皇と
そ申ける御いつくしみふかく民をあはれ
み御めくみあまねく世をおさめ給ふゆへに
国ゆたかに民さかへたりよものうら浪しつか
なれはとをきさかひより御たからをそなへ
せきの戸さしもさゝされは国／＼よりみつ
きものをはこひて君をうやまひたつと
みたてまつるまことに君臣ともにをた
やかなりし御代なりけりされは天地もか
むをうをなし侍るゆへにやかんろをくたして
大きみの御よはひをのへくすりの水をわかして
人民のいのちをやしなひつゝめてたきためし
ともおほかり
けり

［右隻第二扇］
くきやう大しんたちのおほせには雲にひな

つるのまひあそへは池のみきはには亀の出
てほのめきあひてあそふこといこくほんてう
にそのれいいまたきかすしかれともめてた
きそのいはれおほくましますといへとも
これそはしめなる君の御代の久しかるへき
ためしなりとてをの／＼ちよくたう申
さるゝはいかさま御代の久しかるへきゆらい
なりと申あけらるゝわうしなのめならす
御よろこひありて白川の左大臣をめして
仰せらるゝは靏亀の来りてまひあそふ
ことめてたきそのれいわかてういこくのことま
てもみかとへそうし申せと仰られけれは
左大臣かしこまつてうけ給はり候されは
ことしもはやとしくれてさふらへはせいやうの
春もやう／＼あらたまれはいかさま春にも
なりなはいよ／＼めてたきことあるへしとそうし
給ふさるほとにみかとは四季のせちゑの

［右隻第三扇］
もろこしに慈童と申仙人はなんやうせん
の菊よりしたゝる谷水をのみてこそ長生
不老のせんしゆつをはたもち侍るなりまた
このくこを食してよはひをのへたるゆへも侍る
によりてくこをは仙人杖ともなつけ侍るなり
と申すみかとのたまはくなんちらはたゝ人なら
ねは何こともよくそらにおほえたるらんいに
しへのことこそゆかしけれくはしくそうせよ
かしとのたまへは夫婦うけたまはりてち
はやふる神の御代はすなほにしてことの心わ
きかたくこれそとさしてそうすへきことも侍ら
す神武天皇うとのいわや□ての御たんしや

うよりこのかたみやさきのこほりにてはしめ
てあまつひつきのくらいにて候へはまのあたりに
見たてまつりぬそのゝち當国に五十九年おはしまし
て東征し給つゝあし原のなかつ国にとゝまりう
ねひ山かしははらのみやこをはしめ給ふことなとを
くはしくそうし侍れはみかとかしこく給て宮々の

［右隻第四扇］
とうらやみ侍りぬれはあるしのいはくこのあしはら
こくと申は神のうみ出し給し国なれはいつれ
の国よりもめてたき国なりそれにまたこのひ
うかの国と申は天尊あまくたらせ給ふれいちな
り天尊と申は天照大神の御孫のみかとなり
たはちほのくしふるのたけと申はみかとのくた
り給ふ所なりそのゝち三代の御神この国に
すみ給ふゆへにかのみさゝきもこの国にあり
かゝるたつときれいちなれは天人もやうか□し
ちしんもしゆこすされはとし／＼かんろふり
くたりてくにをきよむそのうるほひ草木の
はにとゝまり草木のしつくにくたるその水
をのむものはおのつからくすりの水となりて
よはひわかやきとしひさしくさかむなるへし
これなるくこのはやしにはかんろふりくたれる
ゆへにそのしたゝりをうけてのみまたそのし
つくのなかれたに谷水をのみ侍るゆへにかくのこ
とくちやうせいをたもつなりなんちたちも

［右隻第五扇］
きけすやうにうせにけり御ゆめさめて
のちあやしくおほしめしやかてかの国にち
よくしをそ立られけるあたりの里人

ともちよくしの御けかうをまちえつゝ
ことのしさいをくはしく申せはさてはうた
かふ所なし此松と竹とこそはかの二人の
神躰なりけれとちよくしもかつかうし給
へりされは十八公の゛いはしもの後に
あらはるとて松は君子のとくをしめし
さうせつにも色をへんせす千ねんの
みとりはときはなり竹またその色
松にひとしうしてしかも霜にもおかされ
すよはひ久しきものなりすなはち
その所にやしろをたてあけの玉かきを
ゆひて夫婦を神にいはひ
奉られけり
いはねの宮と申は
これなり

［右隻第六扇］
といろ／＼にたへなる花のそて秋はしくれに
そむるもみちの袖ふゆはさえゆく雪のたもと
をひるかへすゆかりを思ふむらさきの雲の上
人のをんかくのこ゛／＼にけいしゆううゐの
きよくをなせは四かいのなみもしつかにて
さうもくこくと万民にいたるまてゆたかに
さかへて千代よろつ代とつると亀とのあ
ひまひてせんしう万せいとまひ
されはしゆみやうをねかふ人はこのやしろに
まうてゝいのれはそのくはんたちまちかなひて
長生をたもちけりいまの代にいたるまてめて
たきためしに松竹をいはふことは
此ときよりそ
はしまれるとかや

［左隻第一扇］
そも／＼靏亀のゆらいをくはしくたつぬるに
そのかみ神武天皇よりこのかた六代にあたら
せ給ふみかとをはこうあん天皇とそ申
たてまつるこのみかとの第二のわうしなに
はのうらに御殿つくりしてうつらせ給ふ
いはゆるなにはの皇子とそ申たてまつる
まことに世にためしなき事こそ出来に
けれたとへはわうしあるときなん殿に出さ
せ給ふてみなみのかたをなかめさせ給ふに
ふしきや枩のえたにひなつるのつかひて
まひあそふを御らんしける所に又池の
みきはにはかめかいて〻万こうをへし
われなれは万さいらくをうたはむとてうた

［左隻第二扇］
夫婦かんろの水をむすひをきてたてまつれり
みかと此水をきこしめしけるゆへに御よはひ
わかくうるはしくなり給て長生をたもち給ふ
こといく久しかりけりその〻ちおほくの年月を
へてかの夫婦の人々ゆくかたしらすうせ給ひ
けり里人ともあやしみをなしてこ〻かしこたつ
ぬれともつゐにあひへすくたんのいつかのかた
はらに一夜のうちに松と竹と一本つ〻おひいて
たり人々あつまりこれを見てか〻るいはほの
かたはらに俄に松竹のしやうすへきやうやある
へきこれすいかさまかの夫婦の人々のへんけし
給ふなるへしとておの／＼かつかうし手をあ
はせておかみけりさてまたみやこにはみかと
の御ゆめにかの夫婦のものまみへたてまつり此
しやはせかいと申はゑとのさかひなれはつゐには

なからへはつへからすいまよりはとこしなへにみかと
をまもりたてまつらんために神と現し侍るなり
とて一首の哥に

［左隻第三扇］
やかてをんかくそはしまりぬさて池のみ
きはのかめのはひ出てほのめきけるは
われは万年のよはひをたもつものなり
とうたへは杏のこすゑのつるは千とせをいはふ
なるかさねても／＼いく千代をやかさぬらん
千代のためしのかす／＼になにをかひかまし
ひめ小松せんしうらくをいくたひもくり返し
うたふをきけは
いく千代といはふこすゑのひなつるの
そたつをみれは限りしられす
これはときはのまつのこすゑにひなつるの
千代のゆくゑもさかゆくおりさままた
ほうらいの山をはかうにのせなから
いくよろつ代のとしをつむ哉
とほうらいさんのいはほのていをあらはせる
なり亀も万さいらくをまひけれはつるも
八千世のためしに千しうらくをそ舞にける
されはつるとかめと左右にゐてつるは又ち

［左隻第四扇］
限りなし千靏といふとたかひにいく千代
万さいらくとこゑをあはせてうたひつる
は杏にはをたれかめは池のみきはにか
うをほしてまひあそふありさまをわ
うしつく／＼と御らんしてさてもふしきの
すいさうかなむかしより今にいたるまて

かやうのせんせうをきゝをよはすこれそ君
か代の久しかるへきためしなりとてお
ほしめしつゝけて
金銀のいらかをみつ葉四つはにて
とのつくりせし君が代の春
とあそはしてさてもめてたきすいさうかな
われかゝるおりからにあふこと君に二こゝろな
きゆへなりされは此ときにあふことためし
すくなきことふきなりされは君かよはひは
よろつのはしめなるとおほしめしあまたの
大臣くきやう女らうたちをめしくし
給ひて御よろこひのしゆゑんそ

［左隻第五扇］
此おきなともおほきによろこひすなはち
をしへにまかせてかの谷にくたりつゝ水を
くみてのみけるかけにもそのあちはひいさ
きよくよのつねにはことなり天のかんろと
いふものはこれならんとしん／＼きもにめいし
てよろこひたつとむほとに三人のおきなは
はくはつのすかたたちまちにへんしてうる
はしくさかむなるかたちとなれるこそあやし
けれたかひにかほと／＼を見あはせつゝよろこ
ふことかきりなしさらは此水をむつましきも
のともにあたへむとてあるひはおやおほちある
ひはきやうたいしんるいにのませけれはおなしく
その身みなわかやきけりかのこむろむ山といふ
山は玉のしやうする山なりその山へいしかはら
をなくれはときのまにへんして玉となれるかこと
くに此水をのめるおきなしらかたちまちへんし
てくろかみのわらはとなるこそふしきなれされ

はいはね山のちかきあたりの里／＼はおとこも

［左隻第六扇］
みかといよ／＼御かんありて亀にはしうの
くらゐを給はれは靏にはさいしやうのくらゐ
をさつけまし／＼ていく千代万年とつきぬち
きりに君も臣もうちましりつゝいよ／＼
しゆゑんもはしまりて女御后かうゐ宮／＼
ないしないへんけへんもまひうたふされとも
八こゑの鳥のこゑ／＼につけわたれはよこ雲
もはやひきわかれしのゝめはやく明けれはく
わん人かよちやうは御うしよくるまよとやり
つゝくれは君かよはひはおく万年さかへ給ふと
くりかへし／＼いはひのかす／＼こくと万民た
のしみにさかへみちひろく関の戸さゝぬ御代
となるこそめてたけれとさゝめけはみかと
女御宮／＼も御よろこひの
くわんきよなるこそ
めてたけれ